第 70 回　「プリゴジンの考えてきたこと」の言葉

北原和夫著、「プリゴジンの考えてきたこと」（岩波科学ライブラリー67、岩波書店、1999 年 4 月）は物理系の非線形現象に留まらず、生命系、生態系、社会系などを含む複雑系研究の先駆者であるプリゴジンの研究・教育の姿勢を紹介した味わい深い書籍です。著者はプリゴジンに直接指導を受けた経験、著作を読んで得た情報をもとにプリゴジン像を描いています。本稿ではその中から「研究と本の執筆との関係」に焦点を絞って紹介します。

著者は「プリゴジン学派の研究者達の中では若いときに『大部の本』を書いた人が後で大きく伸びた。」ことに注目しています。これはプリゴジンの研究指導方針の偉大な成果です。最先端の研究をしているときには論文を書くことに忙しく本にまとめる余裕がないことから、研究することと本を書くことは両立しないように思えます。現代でも「本などを書いていないで研究しろ」と指摘する指導者が散見されますが、これは的外れです。本を書くということは過去の仕事をまとめるだけでなく、十年先を見据えた思想を読者に訴えることです。著者は「名著とは論文では表現できなかった著者の哲学が語られているもの。」と指摘しています。流行の研究を後追いし、先駆性と独創性のない研究論文を多数書いたとしても、これらをネタとした本は書けません。

大学の教員は研究を通じて教育することが使命ですから、後進を優れた研究の道に誘う本を書かなければなりません。私もこの使命を実感したことがあります。私が米国の研究所に滞在していた時、同僚から「我々は研究者として論文を書いていればよいのだから気楽だ。君は大学の教員なので本を書かなくてはならない。大変だね。」と言われたのです。

著者は「本を書くことは研究の世界的動きの中での歯車としての一研究者の立場から、学問の流れを創出するリーダーへと飛躍する大きな契機となること」と指摘しています。また、「日本では若いときに論文をたくさん書く人は多いものの、一つの思想でまとめた本を書く人は少ない。学問の流れを創出しようとする思想を持って研究を進めることが本を書くことを可能にする。」とも指摘しています。

日本の出版社はこのような「大部の本」には興味を示しません。なぜならその市場は小さく売り上げが伸びないからです。私自身もそれを実感し、「大部の本」は外国の出版社から英文書として出版しています。

プリゴジンに「大部の本」を書く機会を与えられた若い研究者は自立の道を確立する能力を伸ばし、各々の学問の流れを創出するリーダーへと飛躍しました。このようなプリゴジンの教育方針は「第 69 回忘れえぬ言葉」に記した「放牧型の教授」と共通します。

著者によればプリゴジンほど一つのテーマを長く一生考え続けてきた科学者は数少ないそうです。表面的な誤解を受けることもあったそうですが、彼の問題意識の源流はすでに若き日に芽生えていたとのことです。若き日から長く、そして深く考えてきたことが上記のような優れた教育指導方針に繋がったのでしょう。

私がドレスト光子を着想したのは 30 歳前半です。すなわち私の研究の源流も研究者としての駆け出しの時

代に芽生えました。それ以来実験を中心としたドレスト光子の研究を長く続け、また最近では理論研究も発展させています。上記のプリゴジンの考えに触れ、私がドレスト光子のテーマを長く続けることができたこと、さらに論文とともに「大部の書」も外国から出版することができた幸せを実感しています。